

クリスマス☆マーケット開催！

毎年秋に実施していたチャリティーバザーが、今年はクリスマス☆マーケットとして開催されます！

11月1日（日）11：45～14：00

手作りオーナメント、モンゴルから直送のウールソックスなど、よりすぐりの素敵なものをマーケットのためにたくさん集めました。さらには中国、シンガポール、インド、フィンランドのご当地ランチも用意しております。ちょっと早めのクリスマス&世界の料理をぜひお楽しみください！

売上金の寄付について

今回のクリスマス☆マーケットでも、売上金の一部を国内難民支援とウクライナ支援に寄付する予定です。国内難民支援は[難民支援協会](#)、ウクライナ支援は[ワールド・ビジョン](#)を通じて寄付します。詳細はそれぞれのホームページをご覧ください。

日本における難民支援

今年5月のチャリティーバザーにあわせて発行されたニュースレターでは、日本で生活する難民申請者（難民として国から認められていない人）の生活についてお伝えしました。難民認定率が極端に低い日本では、難民として認められない人が多く、かれらは経済的にも社会的にもきわめて厳しい状況におかれています。そのような中で、難民申請者を支援する人びとがいます。今回の支援先である難民支援協会はそのひとつですし、このほかにもたくさんの団体や組織、個人が難民支援にかかわっています。今回

は、日本における難民支援の現状についてお伝えします。

民間主体の難民支援

難民支援にかんする有名な国際機関として、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）があります。世界各地の難民キャンプなどで活動するUNHCRですが、実は日本国内の難民申請者に対するサポートにはほとんどかかわっていません（数少ない取り組みは、難民として認められた人たちに限定されています）。また、公的支援機関としては唯一、「難民事業本部（RHQ）」という組織が難民申請者に対する経済的援助を行っています。しかし、実際に援助を受けられるのは審査を通過したごく一部の人に限られており、さらには受給期間にも制限があるなど、課題は少なくありません。

このように国際機関や公的機関による支援が手薄な日本において、難民申請者を支える役割の大半は、民間の団体・組織や個人が担っています。これらの団体・組織・個人は、難民審査のサポートだけでなく、日常生活支援、医療・経済的援助、居住地の提供、日本語学習のサポートなど、難民申請者が生きていくために不可欠なあらゆる支援にかかわっています。

難民支援の困難

しかし、民間による難民支援は現在、さまざまな困難を抱えています。第一に、支援の持続可能性の問題です。支援活動には、物資の購入費や交通費、医療費、さらには住まいの提供に伴う家賃など、多額の費用がかかります。多くの支援団体や組織は、主に寄付金や助成金、会員からの会費などを資金源としてやりくりしてい

ます。また、個人でサポートする場合は、手元の資金を支援費にまわすケースがほとんどです。現在、日本で難民として保護を求めている人は1万人を超えていますが、限られたリソースの中で全員を支えきことは非常に困難な状況にあります。さらに、難民と認められるまでには数年から十数年という長い年月がかかるため、長期的なサポートが欠かせません。しかし、かれらを取りまく状況が厳しさを増すなか、いつまで助け続けられるのか、そのために必要な資金を確保できるのか、見通しの立たない状態が続いています。

第二に、提供できる支援内容の限界です。たとえば、難民申請をしている最中の人びとは、働くことが認められていない場合が多く、住む場所を探すことすら簡単ではありません。一部の団体は一時的な住まいを提供していますが、それはほんのひと握りであり、大半の人は知人を頼るなどして自力で身を寄せる場所を探さざるを得ないのが現実です。また、ビザを持っていない場合は日本の健康保険に加入できないため、病院にかかった際の治療費は全額自己負担となってしまいます。これに対し、無料や安価で診察を行う医療機関や手助けする団体もありますが、利用できる機会は限られており、近年はその数も減りつつあります。

そして第三に、支援する側の心にかかる負担です。支援は費用面のやりくりだけでなく、人と直接向き合う取り組みだからこそ、当事者とかかわる人びとのメンタルにも大きな影響を及ぼします。特に、母国での経験や不安定な暮らしから、心の問題や悩みを抱えている難民申請者は少なくありません。一方で、サポートする

側の誰もが心のケアの専門家ではないため、相手のつらさに影響され、自分自身もまいってしまふことがあります。それに加え、明確な成果が見えにくく、終わりの見えない不透明な支援環境もまた、当事者とかかわる人びとにとって大きな不安や悩みの原因となっています。

寄付の力

すると、王は彼らに答えます。『まことに、あなたがたに言います。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。』（マタイの福音書 25 章 40 節）

これは、イエス様が語られたたとえ話の言葉です。空腹や渇きに苦しみ、身を寄せる場所もなく、病気や孤立の中にいる人びとに寄り添うこと…それは目の前の人を救うということだけでなく、神様に仕えることでもあるのだとイエス様は教えておられます。戦争や迫害から逃れてきた人びとに向き合うこととは、現代を生きるキリスト者がイエス様の言葉をどう受けとめ、かかわっていくかを考えるきっかけになります。

深川教会ではこれまで、日本で暮らす難民申請者やウクライナ避難民のために、祈りとともに寄付をささげてきました。このような人びとに対して「自分にできることはほんのわずかだ」と思われるかもしれませんが、しかし、私たちが差し出す寄付には大きな意味があります。寄付をつうじて現場の支援を存続させ、そうして「最も小さい者」の命や尊厳を明日へとつなぎとめる、たしかな力となっているのです。（文：中村翔）

